

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 2

1月7日

小林陵侑、2度目のジャンプ週間総合優勝

—惜しくも歴史的グランドスラムを逃す

スキージャンプの小林陵侑（りょうゆう）選手が2021/2022シーズンのジャンプ週間で2度目の総合優勝を飾った。3戦全勝で2度目のグランドスラム達成がかかる最終日を迎えたが、惜しくも最終戦5位に終わり、史上初のグランドスラム2回の歴史的記録達成を逃した。それでも、ジャンプ週間総合優勝2回は、ジャンプ週間史上に長く記録される快挙である。ゴルフでいえば、マスターズ2勝、野球でいえばMLBオールスターMVP2度目のような偉業である。

70年目を迎えたジャンプ週間（Four Hills Tournament, Vierschanzentournee）は、年末年始の1週間で、ドイツとオーストリアの4つの異なるジャンプ台で競われる大会である。今年のジャンプ週間はスキージャンプW杯の第10戦から13戦の4戦がそれにあたり、通常のW杯ポイント（1位100、2位80、3位60ポイントと獲得ポイントが少なくなり、30位が1ポイント）が加算されるだけでなく、4戦8本のジャンプの総合点（生得点の総計）によって優勝者を決める。今年はジャンプ週間70周年を記念して、総合優勝者には10万スイスフラン（およそ1250万円）が授与されたが、小林がこの優勝賞金をゲットした。

小林はこの1週間で、優勝賞金だけでなく、W杯ポイントに付与される賞金（1ポイントにつき100スイスフラン）、予選勝者に与えられる賞金（3200スイスフラン）の満額に近い額を獲得して、W杯中間時点ですでに総額20万スイスフランを超える賞金を獲得している。



### ジャンプ週間表彰式

画面中央が小林選手、左が2位リンドヴィック（ノルウェー）、右が3位グラネロード（ノルウェー）  
小林の右手に GOLDEN EAGLE TROPHY、左手に 10 万スイスフランの賞金ボード

### ジャンプ週間

1953年に始まったジャンプ週間は年末から年始にかけて、ドイツのオーベルストドルフ、ガーミッシュ・パルテンキルヒェン、オーストリアのインスブルック、ビーショフスホーフェンの4つのジャンプ台で、8本のジャンプの総得点を競うトーナメントである。W杯トーナメントの一環として実行されるが、ジャンプ週間の勝者には「金の鷲トロフィー」が贈られる。



Oberstdorf (ドイツ、バイエルン州)

異なる形状のジャンプ台を短時間で移動するために、選手はジャンプ台に慣れる時間がない（地元の選手は有利）。そのために、4つのジャンプ台すべてで優勝するのはきわめて難しい。選手にジャンプ台の形状の得手不得手があり、当日の天候にも左右される。総合優勝するためには、1本の失敗も許されない。

ジャンプ週間のグランドスラム（4つの大会すべてで優勝）を達成した選手は、70年の歴史ある大会で3名しかいない。ハンナヴァルド（ドイツ：2001/2002）、ストック（ポーランド：2017/2018）、小林（2018/2019）の3名である。もし小林選手が最終戦で勝利していれば、史上初の2度目のグランドスラム達成だったのだが、残念ながらその歴史定快挙を逸した。前日の予選、本選ともに優勝し、最終日の予選も1位で通過したので、歴史的快挙達成は間違いないと思われたが、地元のオーストリア選手に負けた。しかも優勝したオーストリアのフーベルは、これがW杯で初めての優勝だった。ジャンプは一発勝負的な要素があり、このようなフラック（fluck）現象がたびたび起きるから、すべてのジャンプ台で優勝するのが難しい。渋谷日向子が突然に全英オープンで優勝したり、ラドゥカヌが全米オープン女子テニスで優勝するような現象である。

日本人選手としては、笠井幸生（1971/1972）、船木和喜（1997/1998）が初戦から第3戦までを制している。笠井は札幌五輪に合わせるために、第4戦を欠場して日本へ戻った。船木は第4戦を制することはできなかったが、このシーズンのジャンプ週間総合優勝を飾った。笠井が日本へ戻る決断をした時に、主催者は大いに落胆した。史上初のグランドスラム達成を目前に、日本へ戻ってしまったからである。当時はまだ、日本スキー連盟はジャンプ週間の重みを知らず、札幌五輪選考会の日本選手権への出場を求めたのだと思われる。



Garmisch-Partenkirchen（ドイツ、バイエルン州）

今シーズンのジャンプ週間では、強風のため、インスブルック大会本選が中止になった。ただ、予選競技会は前日に実行され、小林選手が優勝し、3200 スイスフランの賞金ボードが授与された。インスブルックの記録がキャンセルになったが、すでに授与された賞金 3200 スイスフランは返却する必要はないようだ。この結果、今年のジャンプ週間の予選勝者賞金は4戦4回分ではなく、4戦5回分が配られることになった。小林はそのうち4回分の賞金を獲得し、残り1回分はドイツのアイゼンビヒラー（ガーマッシュ大会）が獲得した。



Innsbruck（オーストリア、チロル州）

インスブルックのジャンプ台は市内の高台にあり、風に影響されやすい難しいジャンプ台である。風の影響で、有力選手のなかで予選落ちした選手がいたが、予選がキャンセルされて命拾いした。本選は翌日へ振替開催されることなく、最終戦予定地のビーショフスホーヘンで2戦連続して行うという変則的な大会になった。

インスブルックのジャンプ台に比べて、ビーショフスホーヘンは両側の林が風よけになっており、風の影響が少ないからである。ただ、助走路の傾斜が緩く、他のジャンプ台に比べて助走路が長く平坦になっている。このような台では飛距離の差があまりでず、小林に不利ではないかと危惧された。



Bischofshohen (オーストリア、ザルツブルグ州)

しかし、小林選手は台の差異を苦にせず、振替第3戦は予選、本選ともに1位となり、ますます2度目のグランドスラム達成に希望をもたせた。1月6日の最終戦も、午後に始まった予選を1位で通過し、ジャンプ週間で公式には3度の予選優勝で4回分の賞金を得るという非常に珍しい記録を達成した。それに伴い、予選勝者賞金だけで、 $3200 \text{ スイスフラン} \times 4 = 12800 \text{ スイスフラン}$ となった。

しかし、本選では2回とも、飛行線がやや低くなり、飛距離を伸ばせなかった。失敗ジャンプではないが、最終2本のジャンプで力の8割しか出せなかった。最後の最後になって、傾斜が緩いこの台に罠に引っかかった。小林としては悔いが残るジャンプとなった。1位のフーベルとはわずか9点差で、歴史的快挙の達成を逃した。まことに残念至極である。70年の歴史に輝く記録となるはずだっただけに、悔いが残る。

ただ、3日目のジャンプを終えて、総合得点で2位のリンドヴィックとは17点差で、1本でも失敗すれば逆転可能な差だった。3戦優勝しても、1戦も勝っていないリンドヴィックが、最終第4戦で逆転する可能性は残されていた。しかし、リンドヴィックは1回目に126メートルの失敗ジャンプで、小林との差をさらに16点広げられた。この時点で小林の総合優勝は確実にになった。これが逆だったら、4戦で3勝もしながら総合優勝できないという逆転劇が起きるところだった。それほどまでにジャンプ週間の総合優勝は難しい。まして、グランドスラムの達成は至難の業である。

### スキージャンプはなぜ難しい

子供の時から訓練を積まないとできない競技だから、競技人口がきわめて少なく、その難しさを経験した人はほんのわずかである。なにしろ、命綱を付けずに、90km/hあるいは100km/hのスピードで、ジャンプ台から飛び出す競技である。ラージヒル競技では基準飛距離は120~125mに設定され、台大きさを2倍にしたフライング競技の基準飛距離は190-200mに設定されているで（フライングの世界記録はオーストリアのクラフト選手がノルウェイ・ヴィケルスンジャンプ台で出した253.5mで、小林選手も252mのスロヴェニア・プラニツァジャンプ台記録を持っている）。失敗すれば、命に係わる。実際、W杯の競技でも1年に1度ほどの割合で、空中からの落下事故が起きている。風の影響やビンディングが不完全で、スキー板が外れると、空中から落下する。

ジャンプの飛距離を決める要素は無限にある。助走のスピードは基本的な要素で、体の大きい選手の方がよりスピードがでる。女子の場合は出発ゲートを上方に上げて、踏切時のスピードが88-90km/h程度に調整している。さらにスキーワックスでもそれなりのスピードの違いがでる。しかし、スピードがジャンプ序盤の決定的な要素ではない。スピード以上に重要なのは、ジャンプ台から離れる瞬間の踏切（サッツ）である。この時、助走姿勢から体を引き上げるのだが、助走で深く座りすぎても浅く座りすぎても、踏切時に力を完全にスキー板に乗せられない。また、踏み切るときに、早く踏み切っても遅く踏み切っても、同じく力を完全にスキー板に乗せられない。このタイミングはほぼ0.1秒単位である。

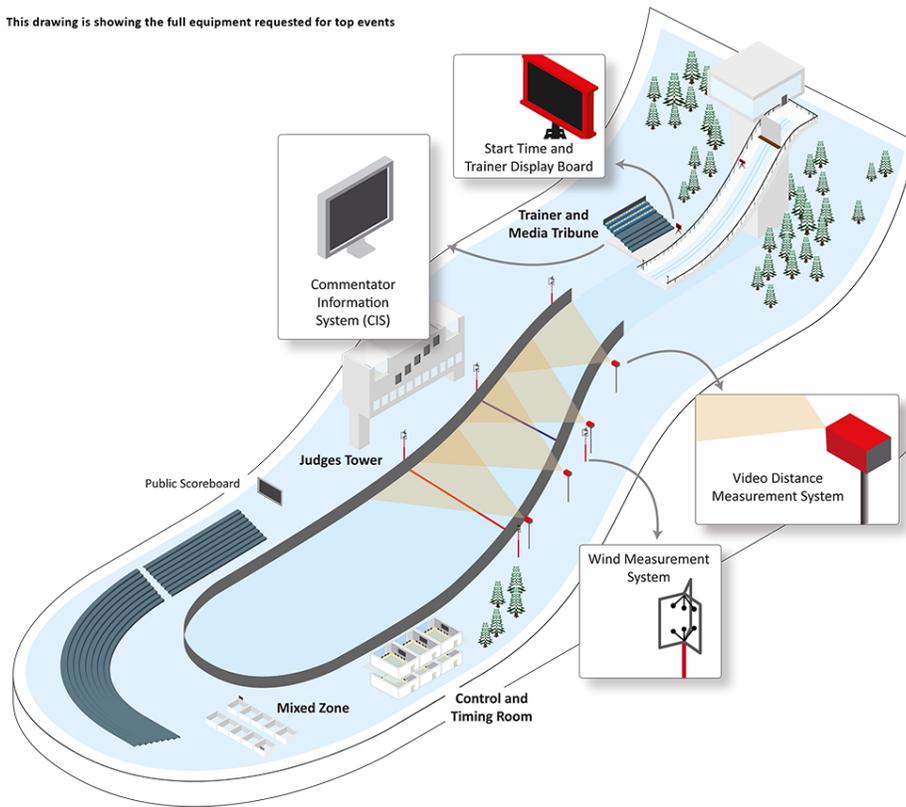
さらに、空中への飛び出し角度とスキー板の固定角度が飛行距離を決める。飛び出し角度が大きいと、最後に失速してドスンというような降り方になる。飛行機の着陸でス

ムーズに降りられず、ドスンと落ちることがある。それと同じである。小林の着地はぶれない空中姿勢とともに、着地がスムーズ（テレマーク姿勢）なので、飛型点（審判5名中、上と下の点数を切り捨てて、中間3名の審判員の点数を総計する。満点が20点）が高い。

小林の最終戦では飛行角度がやや低くなり、わずかに距離がでなかった。これだけ連戦連勝でも、マシンのように角度を保つのが難しい。

これらの基本要因に加え、風が大きな要素になっている。追い風は飛行失速につながり、向かい風は大ジャンプを生む浮力を与える。自然の中で刻々と変化する風が飛距離に影響を与え、場合によっては雪や雨が助走路のスピードを殺してしまう。幸い、現在ではジャンプ台の7か所に風力計が設置され、平均風速が計測されている。追い風であれ向かい風であれ、7か所の風力センサーが一定の風力（1.5m/s）以上を感知する場合は赤ランプが灯り、スタート待機となる。飛行中の風速の平均値をコンピュータで計算し、追い風の場合には飛距離得点に加点し、向かい風の場合は減点する方法が取られている。SWISS TIMING 社がジャンプ関連の測定サービスを一手に引き受けている。

This drawing is showing the full equipment requested for top events



このようにスキージャンプは多くの要素によって決定されるので、常勝することが難しい。他方、シュリーレンツァウアーや女子ジャンプ創成期の高梨沙羅のように、いったん踏切のタイミングを体で覚えると、風やジャンプ台に影響されることなく、連戦連勝ともいえる活躍ができるから面白い。

### 小林選手の賞金

ジャンプ週間で獲得した小林選手の賞金額は、次のように算定できる。

- (1) 総合優勝賞金 100,000 CHF
- (2) 予選勝者賞金  $3,200 \times 4 = 12,800$  CHF
- (3) W杯ポイントにもとづく賞金  $(100 \times 3 + 45) \times 100 = 34,500$  CHF

(1位ポイント  $100 \times 3 = 300$  ポイント+5位ポイント 45ポイント)  $\times$  (1ポイント 100CHF)

合計で、147,300 CHF（およそ 1850 万円）の賞金を獲得したのである。日本ではほとんど賞金のないスポーツだが、国際的に活躍すれば、このような結果になる。

W杯半ばの時点で、今シーズン小林選手がこれまで獲得した賞金総額は 211,900 CHF（およそ 2650 万円）で、2位のドイツのガイゲル選手の 86,750 CHF と大差をつけている。なお、W杯のポイントランキングは、1月7日時点で、次のようになっている。

1位	小林	841
2位	K. Geiger	785
3位	H.E. Granerud	613
4位	M. Lindvik	543
5位	M. Eisenbichler	471

これから北京五輪、その後にスキーフライイング大会が待っている。小林選手は2度目のW杯総合優勝に向かって好位置につけている。ただ、五輪は水物だから、これだけは予想がつかない。